

トーク&トーク

「いま、フクシマの子どもたちは…そして群馬では」

東電福島第一原発事故は、いまだに収束からは程遠く、子どもたちの命や生活のことが心配です。そしてそのことは群馬の子どもたちにとっても他人事ではありません。放射線による汚染は確実に群馬に及んでいます。そこで今年のフォーラム総会後の特別企画として、福島県内の高校生たちとずっと向き合ってきた松本佳充先生（県立川俣高校）と鈴木裕子先生（県立福島商業高校）をお招きしてお話を聞きました。昨年春のフォーラムニュース取材訪問以来の再会となったお二人から、ふるさとを奪われた福島の人々、とりわけ子どもたちが向き合っている現実とさまざまな思いが報告されました。参加者からも複雑な思いや復興への願いが率直に語られ、標題通り、豊かなトーク&トークになりました。



豊かに展開したトーク&トーク

もう、ふるさとに帰れない

松本先生は、大震災後の6月から作り始めたという、画像や統計データを記録した200枚を超えるスライドの中から、荒れ果てていくふるさとの姿や翻弄され続ける高校生の様子に焦点を当てて次のように話されました。

当時は双葉高校に勤めていた。避難命令が出されて他の高校（サテライト校）へ、散り散りに避難することを余儀なくされた高校生たちの生活は、教科書・ノート・鉛筆1本もない状況からスタートした。

間仕切りやプレハブの窮屈な教室、職業科目の実習も不可能、教員の数が足りなくて成立しない科目、行事や部活動も実施困難、8割あった県内就職は2割に激減、将来どこに住み着くかも定かでないなか、どの地域に就職するか悩んだ。親の失業で奨学金返還も不安なため進学を諦めるといった例もあった。今年の卒業生は、震災の年に高校入学だから、母校の校舎には一度も入らずに仮設の校舎から卒業していった。

双葉高校では入学希望者が13人にまで減り、浪江小学校はH25年度希望新入生ゼロと、ふるさとの学校が消えていく。人がいなくなれば復旧・復興も成り立たない。

震災当時の双葉や浪江のガレキの町並み、田畑、常磐線の線路、ご自宅が、時間の経過とと

もにそのまま荒れ果てていく数々の画像、そして先生ご夫妻の車を追いつける愛犬タロの姿が目には焼きつけられました。

考えて、選び取る力

鈴木先生は、川俣高校で生徒たちと作った文化祭のパワーポイント資料を紹介しながら、「ふるさとの味」作りのドラマを語ってくれました。また、その後の学校生活の折々に生徒が書いた感想文を紹介して、困難に立ち向かいながら、授業や地域とのつながりを通して一步一步成長していく生徒たちの姿を明るく語られました。

文化祭で支援を受けて今は仮設住宅で暮らしているじいちゃん・ばあちゃんと蕎麦がきを作ったり、授業で縫った浴衣を着て夏祭りに参加したり、敬老会に参加したりと、地域とのつながりを深めていった。フランスの高校生からの励ましのメッセージを卒業式に飾り、地域の小・中学校にも紹介した。京都の高校生と一緒に地域の人たちと交流した時には、自分の体験や思いをいっぱい語って止まらなかった。地域の人たちとのさまざまな交流を通して、生徒は育てられ、大人になれたと思う。

鈴木先生は、まさに命を守る選択の連続だった生徒たちに、話したり書いたりする機会をた

くさん与えて、体験した事実を記憶にとどめ、自分の考えをまとめさせています。また、家庭科の授業について、教師が正解を与えるのではなく、生徒が自分で考え、自分で選べるようになってほしい。それにはやはり「個人の尊厳」、「幸せに生きる権利」、「憲法」など、自分たちの権利に気づくための「ものさし」を手にいられるような授業を作りたいと話されました。

フロアーからの発言

◆**Aさん**：放射能の基準値に関連して新たな「安全神話」が作られているような気がする。タバコと比較してガンの可能性が語られるなど、違和感を感じる。

◆**Bさん**：奪われたふるさとをとり戻すのは、福島を追い出された人以外にはできない。でも、その先へ進めないでいる。日本中の人がそう思わなければ。大人数の人たちで力になるように動かななくては。

◆**Cさん**：実家が浪江町です。荒れていく実家を見るのがつらい。個人通信『ミツバチの羽音』を出している。福島駅前にある福島共同診療所を支援してほしい。

◆**Dさん**：なによりも被災地を訪問して事実を見て感じることだ。そしてそれを人に伝えることをしなければと思う。私はエスペラント語を使って世界中に発信している。

◆**Eさん**：仕事の関係で福島を訪れることになるかもしれないが、正直に言って「被曝する」ということを引き受けるという感じになっている。福島では家族や友人の間で意見が分かれている、といった話も聞いたが、私の家族もとてもナーバスなので、行くべきか迷っている。

◆**Fさん**：フォーラムニュースで読んだ「答えのない問いに向き合って」の言葉に引っかかっていた。答えはある。「原発をなくすこと」でしようとして短絡的に思っていた。今日のお話で、どこを見ても不安だらけのなかで、本当に光を見せてくれた。子どもたち一人ひとりが、「アッ、そういうことなんだ」と気づき、みんなの思いがつながり、それぞれのところで希望が見えてくる。学び、育つ教育ってこれだと思いました。

◆**Gさん**：他の原発立地自治体や議会あるいは周囲に住んでいる人たちが福島に視察に来ているか。マスコミは第二・第三の事故に対して万全の対応が取れているかを調査して国民に知らせる責任があると思う。マスコミを動かすには我々がモノを言わないとダメだ。



松本先生（左）と鈴木先生

奪われたふるさとをとり戻す

松本先生：私のふるさとのきれいな川には鮎もヤマメもいます。鮭も上がってきます。魚や野菜を親戚に送って喜ばれました。でも、いまは何にも誇れるものがありません。退職したら鮎の友釣りでもして優雅に過ごそうという夢はなくなりました。いま辛いのは、どこの地域に行ってもコミュニティーがないことです。助け助けられて生活してきたものがすべて分断されて、これから築けと言われても不可能です。墓をどうするか、30年後に息子はどうするのかとか、いろいろな問題が山積みですが答えが出ません。でも前に進むしかないんだとやっています。

喋って聞いてもらうことが大切

鈴木先生：私は最初、震災から11月頃までは落ち込んで、なにかやるとすぐに泣いていて喋れない状況でした。いろいろな人のところに行くと喋っているとだんだん元気が出てきて、結局生徒も同じで、聞いてくれる人がいるというのはありがたいです。人々のつながりをズタズタにされたけれど、それをまたとり戻すのはつながりなんだと思います。「迷っています」というお話がありましたが、そういうことも含めていろいろなことが言い合えるということって大切なんだと思います。

《文責・編集：加藤彰男・倉林順一》